園だより

１０月号

令和５年９月２９日
新宿区立西戸山幼稚園
園長　佐　藤　淳　穂

心が動く　体が動く

園長　佐藤　淳穂

４歳児クラスで「新聞ボールづくり」をしました。担任が新聞紙を丸めて見せると、子どもたちもクシュクシュと新聞紙を丸めました。握りこぶし大になった新聞紙をビニールテープで巻くとカラフルなボールに仕上がりました。赤、青、黄色、水色、桃色、橙色、白、緑、黄緑、灰色…とたくさんあるテープの中から好きな色を選んで組み合わせ、「虹色になった！」とＡさん。Ｂさんのボールは左半分が桃色、右半分が灰色というモダンなデザインになりました。

Ｃさんは続けて２個目を作り始めました。３個、４個と作って両手に抱えている子もいます。マイ・ボールが出来上がって、子どもたちはぴょんぴょん跳びはねています。うれしい気持ちは動きに表れるものです。壁に的を付けると、Ｄさんは的に向かって新聞ボールを投げました。「惜しい！」と私が言うと、Ｄさんはコースを外れた新聞ボールを走って拾いに行きました。それを見た子どもたちは次々にＤさんの後ろに並んで順番を待ちました。そう簡単に的には当たらないのですが、Ｄさんはどんどん的に近付いて行って、最後は目の前で投げていました。Ｅさんは手持ちのたくさんのボールを連続で投げました。Ｆさんは拾っては投げ拾っては投げを繰り返して挑戦していました。投げたボールを見失って部屋中を探している子もいました。大事な自分のボールなので、ソファの下から見つかった時はほっとした様子でした。それぞれ、自分のやり方でボール投げを楽しんでいました。

脳科学の専門家で東京大学先端研フェローの小泉英明氏は、「人間の発達の視点から、幼児期に大切なのは脳の外側ではなく内側（脳幹やその周り）を育むことで、大人が教えたことができるようになることよりも自然な発達の中で、まずは聞く、見る、触る、味わう、においを感じるなど五感を刺激したくさん使って感性の土台をしっかりとつくること」「感じる心と意欲があってこそ、子どもの表現も人生も広がる」また、「４歳から６歳頃には、自分とは違う相手にも気持ちがあることを理解して、相手の気持ちを考える力が少しずつ育ち始めます。これはほかの脊椎動物にはないヒトの脳ならではの共感性の芽生えである」と言っています。子どもたちの姿を見ていると、このことを実感します。今日の新聞ボールの遊びでも、思い思いのボールを自分でつくったことで「投げてみたい」という意欲がわき、友達の楽しむ様子を見たことでいろいろな動きが誘発されています。行動の原動力は自分で感じたことであって、幼児期には脳の内側がつくられているのです。

新宿区で実施している運動能力調査では、幼児も小学生も投げる力が弱いという分析結果が出ています。公園ではボール遊びが禁止となっているところが多く、園内でも投げる経験ができるようにしたいところです。課題として「投げる」ことをこなすよりも、心が動いて「投げてみたい」と活動する方が、結果として運動量も多くなり学びも大きいものです。今後も脳の内側を育む体験を重ねられるよう工夫していきます。

コロナ禍に配慮し、学年ごとに実施していた運動会ですが、今年度は全学年合同で行います。憧れのまなざしで年長組を見るさくら組やいちご組、仲間と気持ちを合わせる難しさに向き合うすみれ組、一人一人がたくさんの学びを得ながら当日を迎えます。温かい応援をよろしくお願いいたします。